

## 清原宣賢の漢音声調

——十六世紀前半の実態把握のために——

佐々木 勇

### 一、本稿の目的と対象資料

筆者は先に、論文『蒙求』における日本漢音声調の伝承と衰退〔

（訓点語と訓点資料）第九十九輯。以下、前稿という。〕を発表し、次のことを述べた。

『蒙求』においては、

A. 十六世紀はじめには、伝統的な日本漢音声調の伝承が困難になった。

B. 声点加点がされなくなる直前まで単字の伝統的な漢音声調を保とうとした。

前稿は、『蒙求』に限っての検討であり、他資料の状況を見ることができなかった。

そこで、本稿は、『蒙求』以外の資料の実態を見ることを目的とする。また、対象の時代は、伝統的な日本漢音声調体系<sup>1)</sup>が失われて

いくことが前稿で判明した十六世紀前半とする。

しかし、十六世紀前半に限っても、漢音声調資料は膨大な数にのぼる。そこで、本稿の対象資料をさらに絞りたい。

前稿で調査対象とした『蒙求』では、京都大学附属図書館蔵清原宣賢書写加点（一五二四年頃点）本のあたりが境目となり、伝統的な声調が失われていくことが判明した。そこで、本稿では、十六世紀前半の状況を見る方法として、右の加点者清原宣賢（一四七五—一五五〇）一個人をとりあげ、宣賢の漢音声調の実態を把握することとしたい。

### 二、清原宣賢が声点を加点した資料

まず、清原宣賢の自筆本<sup>2)</sup>の中で、どのような資料に声点が加点されているのかを見る。宣賢自筆本を、1. 漢籍訓点資料、2. 抄物、3. 字書・辞書・その他に便宜上分けることにする。

1. 漢籍訓点資料

宣賢は、清原家の学問を反映して、経書を中心に、漢籍訓点資料を多く現代に残している。

いま、漢籍における声点加點の様子を知るために、現時点で原本あるいはマイクロフィルム等を調査できた文献を掲げると左の如くである。加點年順に通し番号を付して挙げる（加點年未詳のものは最後に一括する）。声点加點の見られる資料は、番号を○で囲む。

- ①. 大東急記念文庫蔵『毛詩』(22+34+39) 永正九・十年(一五一一・一五一一三) 写本。声点あり。
- ②. 成實堂文庫蔵『尚書』卷第三・四(新修善本書目、226頁) 永正十年(一五一一三) 写本。声点あり。以下、③④⑦は本書の傍卷。
- ③. 国立国会図書館蔵『尚書』卷第五(WA16+68) 永正十一年(一五一一四) 写本。声点あり。
- ④. 某氏蔵『尚書』卷第六・九<sup>(3)</sup>。永正十一年写本。声点あり。
- ⑤. 京都大学附属図書館蔵『尚書』卷第七・十(1+63+5頁) 永正十一年写本。声点あり。
- ⑥. 筑波大学附属図書館蔵『尚書』卷第八(南摩文庫第三九号) 永正十一年写本。声点あり。
- ⑦. 某氏蔵『尚書』卷第十一+十三<sup>(4)</sup>。永正十一年写本。声点あり。
- ⑧. 京都大学附属図書館蔵『大学』(清家1+66+6頁) 永正十一年

点あり。ただし、声点加點は粗であり、大部分は濁声点である。

- 20. 京都大学附属図書館蔵『易学啓蒙通釈』(清家1+62+5頁) 書写年未詳。声点なし。
- 21. 京都大学附属図書館蔵『胡曾詩』(清家4+08+2頁) 書写年未詳。声点なし。
- 22. 京都大学附属図書館蔵『三略講義』(清家8+21+3頁) 書写年未詳。声点なし。
- 23. 京都大学附属図書館蔵『司馬法』(清家8+21+2頁) 書写年未詳。声点なし。

以上である。右により、漢籍の多くのものに声点加點が存することが知られる。具体的に書名を挙げれば、『毛詩』『尚書』『大学』『春秋経伝集解』『孟子』『禮記』『蒙求』『孝経』『長恨歌並琵琶行』である。これらの中で、『蒙求』と『長恨歌並琵琶行』とは、他の資料と加點の様子が異なる。

『蒙求』二本は、上・中・下巻のうち上巻に一切声点を加點しない本⑩と、中巻にのみ加點する本⑪とである。また、『長恨歌並琵琶行』は、声点の加點が粗であり、かつ大部分が濁声点である。これに対して、『毛詩』『尚書』『大学』『春秋経伝集解』『孟子』『禮記』『孝経』は、全巻に声点加點が見られる。

ここから、十三経に教えられる経書に、詳しい声点加點が存する実態を見ることが出来る。

写本。声点あり。

- ⑨. 京都大学附属図書館蔵『春秋経伝集解』(1+65+5頁) 永正十二年(一五一一五) 写本。声点あり。
- ⑩. 京都大学附属図書館蔵『孟子』(1+66+2頁) 永正十三年(一五一一六) 以前写本。声点あり。
- ⑪. 書院部蔵『禮記』(55+18) 永正十六年(一五一一九) 写本。声点あり。
- ⑫. 書院部蔵『春秋経伝集解』(55+20) 永正十七年写本。声点あり。
- ⑬. 静嘉堂文庫蔵『毛詩』(8478+303+1) 永正十八年(一五二二) 天文四年(一五三五) 写本。声点あり。
- ⑭. 京都大学附属図書館蔵『標題補注蒙求』(清家5+67+2頁) 大永四年(一五二四) 写本。中下巻にのみ声点あり。
- ⑮. 天理大学附属天理図書館蔵『古文孝経』(122+1+11) 天文六年(一五三六) 写本。声点あり。
- ⑯. 静嘉堂文庫蔵『春秋経伝集解』(8152+101+12) 書写年未詳。奥書に「宣賢」「宗尤」とあり。声点あり。
- 17. 京都大学附属図書館蔵『胡曾詠史詩注』(清家4+08+1頁) 書写年未詳。奥書に「宗尤」とあり。声点なし。
- ⑰. 京都大学附属図書館蔵『標題徐状元補注蒙求』(清家5+67+2頁) 書写年未詳。中巻にのみ声点あり。
- ⑱. 阪本龍門文庫蔵『長恨歌並琵琶行』(二ノ七) 書写年未詳。声

2. 抄物

次に、講義稿本・講義録である抄物を見る。

宣賢自筆の抄物のうち、原本またはマイクロフィルム等を実見できたものは、次の資料である。1. 漢籍訓点資料と同様に掲げる。

- ア. 天理大学附属天理図書館蔵『日本書紀纂疏』(210+1+177) 永正七・八年(一五一一〇・一五一一一) 写本。声点なし。
- イ. 京都大学附属図書館蔵『孟子抄』(1+66+4頁) 永正十三年(一五一一六) 写本。声点なし。
- ⑳. 天理大学附属天理図書館蔵『日本書紀抄』(210+1+151) 大永六・七年(一五二六・一五二七) 写本。声点あり。
- ㉑. 天理大学附属天理図書館蔵『日本書紀神代卷抄』(210+1+147) 書写年未詳。奥書に「宣賢」とあり。声点あり。
- ㉒. 天理大学附属天理図書館蔵『神書聞塵』(210+1+103) 書写年未詳。声点なし。
- カ. 慶應義塾大学図書館蔵『蒙求聴塵』(132+X+31) 大永六年+享祿二年(一五二六+一五二九) 写本。声点なし。
- キ. 天理大学附属天理図書館蔵『行事秘』(吉42+434) 享祿三年(一五三〇) 写本。声点なし。
- ク. 大東急記念文庫蔵『孝経抄』(22+35+45) 書写年未詳。声点なし。

㉑ 天理大学附属天理図書館蔵『周易抄』(122. 1イ13) 享祿四年(一五三一)写本。引用部分にのみ声点あり。

㉒ 京都大学附属図書館蔵『三略秘抄』(清家8・21サ2貴) 天文三年(一五三四)写本。声点なし。

㉓ 京都大学附属図書館蔵『長恨歌並琵琶行秘抄』(清家4・08チ3貴) 天文十二年(一五四三)写本。『長恨歌並琵琶行』引用部分に濁声点のみあり。

㉔ 天理大学附属天理図書館蔵『伊勢物語惟清抄』(913. 32イ75) 天文十七年(一五四八)写本。声点なし。

㉕ 天理大学附属天理図書館蔵『日本書紀神代聞書』(210. 1イ169) 書写年未詳。声点なし。

㉖ 京都大学附属図書館蔵『毛詩聽塵』(1・63シ6貴) 書写年未詳。奥書に「宣賢」とあり。声点なし。

㉗ 京都大学附属図書館蔵『漢書抄』(清家5・43カ1貴) 書写年未詳。奥書に「宣賢」とあり。声点なし。

㉘ 京都大学附属図書館蔵『六韜秘抄』(清家8・21リ2貴) 書写年未詳。奥書に「宣賢」「宗尤」とあり。声点なし。

㉙ 京都大学附属図書館蔵『左伝聽塵』(清家1・65サ1貴) 書写年未詳。奥書に「宗尤」とあり。声点なし。(以下、ツ・テは本書と傍巻。)

㉚ 京都大学附属図書館蔵『春秋左傳抄』(1・65シ3貴) 書写年未詳。声点なし。

㉛ 京都大学附属図書館蔵『史記抄』(清家5・42シ1貴) 書写年未詳。声点なし。

㉜ 大東急記念文庫蔵『大学聽塵』(22・35・43) 書写年未詳。『大学』引用部分に声点あり。

㉝ 天理大学附属天理図書館蔵『周易図略(周易命期略秘伝)』(122. 1イ17) 書写年未詳。声点なし。

㉞ 京都大学附属図書館蔵『命期秘伝』(清家8・87メ1) 書写年未詳。声点なし。

㉟ 天理大学附属天理図書館蔵『周易抄』(122. 1イ17) 書写年未詳。声点なし。

㊱ 京都大学附属図書館蔵『初学用捨抄』(清家4・24シ1) 書写年未詳。声点なし。

以上である。これら抄物には、声点加点は希である。とりわけ、『蒙求』には声点を加点した宣賢が、『蒙求』の講義稿本である『蒙求聴塵』には漢字音声調を示す声点を加点していないことは注目される。これは、鎌倉時代には、和歌集である『蒙求和歌』(国会図書館蔵本鎌倉初期墨点)にさき詳しい声点加点が見られたのと対照的である(前稿参照)。

このような中であって、声点が加点されているのは、㉑『日本書紀抄』・㉒『日本書紀神代卷抄』・㉓『周易抄』・㉔『長恨歌並琵琶行秘抄』・㉕『孝経秘抄』・㉖『日本紀聞書拔書』・㉗『大学聽塵』

詳。奥書に「宗尤」とあり。声点なし。

㉟ 成實堂文庫蔵『春秋左氏伝私抄』(新修善本書目、230頁) 書写年未詳。奥書に「宗尤」とあり。声点なし。

㊱ 京都大学附属図書館蔵『礼記』(1・64ラ2貴) 書写年未詳。奥書に「宗尤」とあり。声点なし。

㊲ 大東急記念文庫蔵『孝経秘抄』(22・35・44) 書写年未詳。巻頭に「宗尤」とあり。濁声点のみ有り。

㊳ 京都大学附属図書館蔵『新古今注』(清家4・23シ1) 書写年未詳。奥書に「環翠軒」とあり。声点なし。

㊴ 天理大学附属天理図書館蔵『日本紀聞書拔書』(210. 1イ141) 書写年未詳。声点二例あり。

㊵ 京都大学附属図書館蔵『易学啓蒙通釈口義』(清家1・62エ4貴) 書写年未詳。声点なし。

㊶ 京都大学附属図書館蔵『易学啓蒙抄』(清家1・62エ3貴) 書写年未詳。声点なし。

㊷ 京都大学附属図書館蔵『尚書抄』(清家1・63シ1貴) 書写年未詳。声点なし。

㊸ 京都大学附属図書館蔵『尚書抄』(1・63シ8貴) 書写年未詳。声点なし。(次と傍巻)

㊹ 京都大学附属図書館蔵『尚書聽塵』(清家1・63シ4貴) 書写年未詳。声点なし。

である。

次に、これらの資料の声点について、検討する。

㉑『日本書紀抄』の声点は、大字で書かれた日本書紀本文に集中している。この本には、宣賢の抄物には珍しく比較的詳しい奥書が存し、その中に「文字讀清濁以朱指聲訖ト氏秘説不違背一句」という文言が見える。そこで、この資料の日本書紀本文の声点を卜部家の古写本(乾元本に依る)の声点と比較すると、奥書に違わずよく一致している。

㉒『日本書紀神代卷抄』の声点は、神名などわずかなもので、右と同様に考えられる。

㉓『周易抄』・㉔『長恨歌並琵琶行秘抄』・㉕『孝経秘抄』・㉖『大学聽塵』の声点加点は、注釈の対象である原漢文の引用部分に限られる。これは、引用の底本に加点されていた可能性が高い。しかも、例数は少なく、濁声点のみの資料もある。

㉗『日本紀聞書拔書』の声点は、「名(き)法(ほ)要集」の二例が全例である。「法」に去声点加点されていることから、清濁のみを示していると考えられる。

以上、抄物の声点は、例外的である。その少数の声点は、抄物作成の参考とした資料に既に加点されていたと考えられるもの、あるいは清濁を示すことが目的のものであった。

### 3. 字書・辞書・その他

まず、宣賢筆の字書・辞書類を見る。

- ④ 京都大学附属図書館蔵『塵芥』(清家4185シ1貴)書写年未詳。本資料には、若干の声点がある。この声点は、宣賢加點と考えられているが、声調は『切韻』系韻書に一致し、伝承日本漢音声調とは異なる。『清原宣賢自筆伊路波分類体辞書 塵芥』(臨川書店)の安田章の解説では、この本は、作詩のための字書であることが説かれている。

- ⑤ 京都大学附属図書館蔵『宣賢卿字書』(清家4185セ1貴)書写年未詳。

本資料には、例外的に五字六例に声点が存するのみである。声調は、「閉」に去声が加點されていることが『切韻』系韻書・伝承日本漢音声調とも合わない。他の四字は、両者に一致する。例数が少ないため、事実の指摘にとどめる。

- ⑥ 京都大学附属図書館蔵『聚分韻略』(清家487シ4貴)書写年未詳。

本資料の声点は、『蒙求』を引く「郭巨将坑」の「将坑」に加點された平声点二例がそのすべてである。

- ⑦ 本資料によって、宣賢の韻書学習の跡を伺うことができる。なお、宣賢は、享祿元年(一五二八)に張麟之の『韻鏡』を覆刻している。

- ⑧ 京都大学附属図書館蔵『拾芥抄』(清家517シ9貴)書写年未詳。

- J. 天理大学附属天理図書館蔵『陰陽行儀』(吉421426)書写年未詳。声点なし。

右のEからJまで、声点が加點されているのは、⑥『年中行事』のみである。この『年中行事』には、「以秘説加點了尤可禁外見/少納言清原宣賢」と奥書があり、移点本であることが知られる。いま、三條公忠書写加點本と比較すると、本文・訓点ともに、ほとんど一致している。声点についても、移点の際の誤りかと考えられる数例を除いて、加點箇所・声調とも一致する。

- 以上、右に3. 字書・辞書・その他として一括して掲げた資料も、2. 抄物と同じく、声点加點は例外的である。

### 三、清原宣賢の漢音声調

前節では、清原宣賢書写の資料を、1. 漢籍、2. 抄物、3. 字書・辞書・その他に便宜上分けて、声点が加點されているか否かを見た。その結果、声点加點資料は、漢籍の経書に集中し、詳しい声点加點は経書にのみ見られることが明らかになった。本節では、経書に加點した宣賢の声点とはどのようなものなのかを調査する。

#### 1. 宣賢加點本と鎌倉期清原家加點本

いま、鎌倉時代の清原家訓点本が現存し比較が可能である経書の

詳。声点あり。ただし、この本は寄合書であり、宣賢書写部分が存する上巻には声点はない。

本資料の声点は、中巻の「門号起事」「殿告事」「御装物所」などの固有名詞にのみ見られる。本資料と同じく明応年間甘露寺親長伝写系統本である天正十七年吉田梵舜写本を見ると、声点加點箇所は同一であり、声点も大部分一致する。よって、両者の底本においてすでにこの声点が加點されていたものと考えられる。

このように、字書・辞書への声点加點は、例数が少ない。そのわずかな声点も、『切韻』系韻書またはそれを引用した書に依ったもの、あるいは底本に存したものである。

次に、これまでの分類に入らない資料をここに掲げる。

- E. 京都大学附属図書館蔵『御侍讀次第』(清家1169コ1貴)永正四年(一五〇七)写本。声点なし。

- F. 天理大学附属天理図書館蔵『三種大威護身神法相傳切紙』(吉421391)大永八年(一五二八)書写。声点なし。

- ⑨ 京都大学附属図書館蔵『年中行事』(清家517ネ2貴)書写年未詳。奥書に「宣賢」とあり。声点あり。

- H. 天理大学附属天理図書館蔵『中臣蔵』(吉44298)書写年未詳。声点なし。

- I. 天理大学附属天理図書館蔵『神道口決』(吉421421)書写年未詳。声点なし。

中から、代表として、『毛詩』『尚書』を取り上げる。  
はじめに、宣賢書写加點本の奥書を掲げる。

毛詩二十卷(静嘉堂文庫蔵本)

〈巻第一奥書〉

承安四年(一一七四)九月十九日朝問詰老眼加假字反音等了毛鄭之説既以分別好/事之徒何不悦且乎 大外史清 判/文永十年(一一七三)閏十月十四日見合或古本了 大外史 判/(十一行略)/永正十八年(一一五二)五月六日於甘露寺垂相亭講釈了。

※從三位清原宣賢

尚書卷第五(国立国会図書館蔵本)

〈巻第五奥書〉

永正十一年(一一五二)二月廿三日以唐本終写功即加朱墨訖/少納言清原朝臣(宣賢花押)/正和二年(一一三三)十月九日點訖于時寒風折枝而烈時雨與葉而灑而已/建長三年(一一五二)七月廿五日以家秘説奉授垂相導閣了博士清原仲宣/以右奥書本加點一校了 宣賢(花押)/宣賢一

これらの奥書から、宣賢の訓点は、鎌倉時代の清原家の訓点本から移点したものであることが知られる。新注を採用した宣賢であったが、経書本文の訓点については保守的であったことが指摘されており、宣賢加點の声点も、鎌倉期点を正確に移点したものであることが予想される。しかし、この点についての具体的な報告はなされ

ていない。

そこで、このことを確認するために、鎌倉時代の訓点本と比較してみたい。ただし、宣賢が直接の移点底本とした資料は、現存しないらしい。そのため、清原家の鎌倉時代訓点本という共通点を持つ資料との比較を行なう。

比較資料として、次のものを選ぶ。

『毛詩』は、書陵部蔵金沢文庫本群書治要所収本を用いる。奥書は、左の通りである。

〈奥書〉建長五年(一二五三)十月五日點之了／蓋依洒掃員外少

尹之殿命也／前参河守清原(教隆花押)

『尚書』は、神宮徴古館蔵本を用い、巻第五について比較する。

奥書は、左の通りである。

〈奥書〉文永第四年(一二六七)仲春廿一日唯課徴功早終授／點

而已／書博士清原教有(正和二年(一二三三)四月十一

日)以家説授申／生徳殿訖／明経得業生清原長隆

### 2. 字音注の数の比較

まず、字音注の例数を形態別に比較すると、次の如くである。調査は、両本の本文が同一の部分について行なった。

『毛詩』	反切・同音字注	仮名音注	声点
群書治要本	五二	二八九	五〇六

そこで、『尚書』についても金沢文庫本群書治要との比較を行なつてみる。群書治要は、抄出本であるため同一の比較はできないが、

群書治要巻第二尚書について、宣賢本巻第五と本文の分量がほぼ等しくなる三〇〇行目までを調査すると、左のようになる。(神宮徴古館本の数も、再度掲げる。)

『尚書』	反切・同音字注	仮名音注	声点
神宮徴古館本	二二三	一六三	一一三
群書治要本	二四	一五二	三〇六
宣賢本	二〇九	一八六	三六九

右の通り、声点については、宣賢本は、神宮徴古館本よりも群書治要本の方に近い加点数を持つ。群書治要本と比較して、宣賢本の方に声点がやや多いのも、『毛詩』の場合に等しい。

よって、宣賢が新たに加点了した声点がなかったとすれば、移点底本は現存の金沢文庫本群書治要よりやや多い声点加点数を持つものであったことになる。この点は不明であるが、移点にあたって宣賢は、反切・同音字注のように、声点を削除しなかったことは確認された。

### 3. 声調の比較

次に、鎌倉時代加点本と宣賢加点本との声点が示す声調を比較したい。そのために、宣賢本が完存する『毛詩』を、鎌倉時代の群書

宣賢本

八

三四三

六四五

鎌倉時代に入ると、反切注・同音字注から仮名音注へ注音法が移行することが、沼本克明によって指摘されている。この指摘の通り、『毛詩』では、鎌倉時代中期の群書治要本ですでに反切注よりも仮名音注の方がはるかに多く、宣賢本では反切注が極端に減っている。そして、それに相当する数の仮名音注が増加している。

一方、本稿で問題としている声点の加点数は、宣賢本の方に多い。つきに、『尚書』でも同様な作業を行なう。結果は、左の通りである。

『尚書』巻第五	反切・同音字注	仮名音注	声点
神宮徴古館本	二二三	一六三	一一三
宣賢本	二〇九	一八六	三六九

神宮徴古館本・宣賢本ともに、反切・同音字注を比較的多く残している。先の沼本の指摘は、大きな流れを言ったもので、個々の資料には差が有るようである。

仮名音注が宣賢本の方に多いのは、『毛詩』と同様である。鎌倉期点で反切・同音字注である箇所が宣賢本で仮名音注になっている箇所がある点も、『毛詩』と等しい。

今問題にしている声点の数に注目すれば、宣賢本は神宮徴古館本の三倍である。しかし、『毛詩』の場合と合わせて見ると、これは神宮徴古館本の声点が少ないための現象のようである。

治要本と比較する。

はじめに、それぞれの訓点による調説例を若干示す。

群書治要本『毛詩』	關 <small>モト</small> 睡 <small>モト</small> は后妃 <small>ノ</small> の <small>ノ</small> 之 <small>ノ</small> 徳 <small>ナリ</small> 也 <small>ノ</small> 風 <small>ノ</small> 始 <small>ナリ</small> 也 <small>ノ</small> 之 <small>ノ</small> 始 <small>ナリ</small> 也 <small>ノ</small>	(關睡后妃之徳也風之始也)(卷第三)
宣賢本『毛詩』	關 <small>モト</small> 睡 <small>モト</small> は后妃 <small>ノ</small> の <small>ノ</small> 之 <small>ノ</small> 徳 <small>ナリ</small> 也 <small>ノ</small> 風 <small>ノ</small> 始 <small>ナリ</small> 也 <small>ノ</small> 之 <small>ノ</small> 始 <small>ナリ</small> 也 <small>ノ</small>	(關睡后妃之徳也風之始也)(卷第三)

之を風モトと謂フ (謂之風)(卷第一)

右の例でもその一端が伺えるが、宣賢本には、軽声が無い。これは、宣賢加點資料のすべてについて言えることである。

右のように、『毛詩』二十巻について群書治要本と宣賢本とを対比させ、加點箇所的一致・不一致、声調の一致・不一致の例数を数えると、次のようになる。ただし、軽重のみ相違するもの(平声と平声輕、入声と入声輕)は声調一致に算入している。

群書治要本 宣賢本	加點箇所一致		一方にのみ加點
	声調一致	声調不一致	
三〇〇	三〇〇	七	二〇六
三〇〇	三〇〇	七	三四五

群書治要本鎌倉期点と比較した場合、加點箇所が一致するものは半数程度でしかない。しかし、加點箇所が一致する例の大部分は声調も一致している。よって、宣賢本にのみ加點が見られる箇所も、宣賢が底本とした鎌倉期点本には加點があり、同一の声点が加點されていたものかも知れない。だが、資料の制約上、宣賢が移点底本にどの程度依っているかは明らかでない。

そこで、次に、それぞれの資料の声調体系を比較してみる。

両資料の声調を『廣韻』の体系に当てはめた表を作成すると、後掲の表1・表2となる。ともに、上声全濁字で去声化したものは半数程度であり、宣賢点に輕声が存しないことを除いては、体系上の相違は無い。共通する三〇〇例を除外して同様の表を作成しても、結果は変わらない（この表を掲げること省略した）。

宣賢が増補した声点があったのかどうかは、不明である。しかし、右の検討から、宣賢の奥書どおり、声点は鎌倉期点の声点を移点したものが大勢を占めると考えるのが穩当であろう。

#### 4. 清原宣賢における日本漢音声調

宣賢は、漢籍經書には声点を加點した。しかし、その他の資料での声点は、例外的であった。

漢籍の抄物にも声点が加點されないのは、伝統的訓読法を伝えようとした漢籍そのものと、その解説である抄物との加點態度の相違

が原因であろう。<sup>(9)</sup>

宣賢は、辞書・字書にも声点を加點することが希であった。

一方、作詩のために漢字の四声を知ることが、宣賢にとっても重要であった。その拠り所としては、『切韻]系韻書を用いている。

これらのことから、当時の碩学宣賢にも、經書の訓読といった限られた場合を除いては、伝統的な日本漢音声調は不要なものになっていたと考えられる。

#### 四、結論

以上、本稿の目的を、『蒙求』以外の資料での十六世紀前半の日本漢音声調の実態を見ることとして検討してきた。もともと、清原宣賢の加點資料を見ただけであるので、この時代全体の様子はわからない。

しかし、前稿の『蒙求』の状況と大きく異なるという見通しを立てることができた。すなわち、声点加點が一般的でないことから、遅くとも十六世紀はじめには、伝統的な日本漢音声調の維持が困難になったであろうということである。

このような中で、伝統的な日本漢音声調を残したのが經書訓点資料であった。これは、清原家の家訓であるため伝承されたものである。清原家学の擁護のため、伝来の訓法を残そうとつとめたことの証として引かれる宣賢自筆奥書に、次のものがある。

云  
x之  
(2箇所)

京都大学附属図書館蔵『中庸』(1166チ2貴) 室町末期写本奥書

僧俗字徒・関東学士十三經訓點・清濁・悉背先儒之說／且失師家之伝・悲哉・予憐子孫赴邪路・一字不闕點之亦／清濁字聲指之

為令讀易不依仮名使是亦一之術也。可／深秘而已。 侍從三

位清原朝臣(宣賢花押)〈俗名宣賢法名宗尤／号環翠軒〉

京都大学附属図書館蔵『論語』(1166ロ8貴) 室町末期写本奥書

世俗文字讀之訓點之字聲・悉失師說・後輩以此點并字聲／可為證。

為易讀不依仮名使點之。為使幼童易解一術也。 侍從三位入道

清原朝臣(宣賢花押)

「悉背先儒之說」という時代に、古説を保守しようとした宣賢の經書漢音声調は、鎌倉時代のそれを正確に移点したものと考えられた。

この点が、前稿で「声点加點がされなくなる直前まで単字の伝統的な漢音声調を保とうとした。」としたことにあたる。

しかし、江戸時代に入っても声点を加點した經書訓点資料が残る一方、右に奥書を引いた『中庸』『論語』には、声点が一切加點されていらない。この二本は、奥書のみ宣賢自筆なのである。ここに、

日本漢音声調伝承の必要性が消失していく様を見ることが出来る。

今後、より多くの資料の調査を重ねること、鎌倉時代と宣賢の時代との間を埋めることが課題として残っている。

注

(1) ここで、伝統的な日本漢音声調体系とは、その中心をなす六声体系を指すこととする。これは、中国中古音に次のように対応するものである。

『廣韻』平声の全濁・次濁——平声(重)

『廣韻』平声の全清・次清——平声輕

『廣韻』上声の全清・次清・次濁——上声

『廣韻』上声の全濁——上声

『廣韻』去声——去声

『廣韻』入声の全清・次清・次濁——入声輕

『廣韻』入声の全濁——入声(重)

(2) この期は伝統的な日本漢音声調が失われる時期であると予想されるため、宣賢自筆本からの転写本は、自筆本に存した声点を省略する可能性があるので、取り上げない。

(3) (4) 斯道文庫蔵紙焼写真による。

(5) 調査は『古典研究会叢書漢籍之部113 毛詩鄭箋(一)』(三)『汲古書院、一九九二年』一九九四年の複製本に依る。

(6) 斯道文庫蔵マイクロフィルムによる。

(7) 『抄物』の定義は、『国語学大辞典』(国語学会編、東京堂出版、一九八〇年)の柳田征司の記述に従う。

(8) (9) 天理図書館善本叢書27に依る。

(10) (11) 永正十一〜十五の間の成立という小林千草説(『日本書紀抄の国語学的研究』(清文堂、一九九二年)一八六頁・一九一頁)により、ここに記す。

(12) 宣賢壮年期の書写と推定されている(阿部隆一「室町時代邦人撰述孝経注釈書考」(大倉山論集)第八輯、一九六〇年七月)。

(13) 斯道文庫蔵マイクロフィルムによる。



表1 群書治要本毛詩1253年点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	
平	62	20	34	29	2	1											148
平輕	24	4	2	1					1								32
上			1	4	41	11	11	19		1							88
去	5		2	1	1	1	8	2	73	10	40	29					172
入輕													8	1	3	4	16
入													28	4	6	12	50

(数字は延べの例数である。空欄は用例が無いことを示す。表2も同じ。)

表2 宣賢本毛詩1521年点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	
平	101	18	47	34	1	2			1	1	2						207
平輕																	0
上		1		2	48	20	16	26	1								114
去	5		6	2			24		100	13	58	46					254
入輕																	0
入													34	3	15	15	67

注を比較的多く残しているからである。大東急記念文庫本『毛詩』の卷一について数えると、反切・同音字注合わせて三八一例にのぼり、群書治要本『毛詩』よりはるかに多い。この宣賢本『尚書』の書写加点多大東急記念文庫本『毛詩』に続く早いものである。よって、宣賢は、若い頃は反切・同音字注を丁寧に移点したが、のちには省略することが多くなつたのではないかと考えられる。

(38) 保守性が高いといわれる経書訓点資料でも、宣賢の時代までは軽声を保てなかつたことであろう。鎌倉時代には存した軽声が、どの時点で消えたのかは今後の課題である。

(39) 金沢文庫本群書治要本『毛詩』の加点数が少ない。しかし、筆者はかつて、巻第一(第十(経書の部、巻第四欠)全体の声点を同様に処理した表を公表したことがある(佐々木勇「日本漢音の軽声減少について」漢音の国語化の一側面)、「国語国文」第六四卷第一〇号、一九九五年十月)。これも、表1と同体系と見られる。

(40) 宣賢は、抄物の作成に当たって、原文に忠実とは限らず、「日本人向きに、いわば意識するところがあつた」ことが指摘されている(鈴木博「長恨歌抄について」宣賢の講解態度)、「国語国文」第六四卷第四号、一九七七年四月)。

(41) たとえば、本稿で資料とした宣賢本『毛詩』と全く同じ奥書を持ち、慶長二年あるいは同三年の書写奥書を有する訓点本が京都大学附属図書館にある(清家1-63モ2費)。また、同館には宣賢の訓点本を江戸初期に訓読した資料がある(清家1-63モ1費)。これらは、ともに、宣賢本の声点をほぼそのまま写している。また、大英図書館にも、宣賢の訓点を承ける江戸初期の加点数があり、これにも声点が加添されている(稲垣瑞穂「毛詩鄭箋の訓点について」E・サト「旧蔵本より」)、「静岡女子短期大学研究紀要」第三〇・三一号、一九八三年三月・一九八四年三月。

月、および同一「大英図書館所蔵の訓点資料より」毛詩鄭箋卷第一「文道考」△訓点語と訓点資料「第八十八輯。一九九二年三月」による)。これら江戸時代以降の経書訓点資料の声点も、室町時代の資料の延長線上に捉えられよう。よって、日本漢字音史の資料として経書訓点資料を利用する際には、この保守性に十分注意すべきである。

(42) 十六世紀初頭書写の文明本『節用集』では、声点は『切韻』系韻書の所属巻に従っており、伝承漢音をまったく反映していないことが指摘されている(湯沢實幸「文明本節用集の朱声点について」△「国語学」第九一集、一九七二年十二月)。

△付記) 本稿は、平成八年度広島大学国語国文学会秋季研究集会での口頭発表後半を修正したものである。原本等の閲覧をご許可下さった所蔵機関、ならびに資料の写真を御貸与下さった小林芳規先生に、御礼申し上げます。また、このような形でまとめられたのは、広島国語談話会での菅原範夫先生のご教示によるものである。記して深謝申し上げます。なお、本稿は、平成八年度文部省科学研究費補助金(奨励研究A)による成果の一部である。

— ささき・いさむ、本学学校教育学部助教 —